平成 29 年 度海洋水産資源開発事業
＜いか釣：北太平洋南西部海域＞の調査結果概要

調 査 船：第三十開洋丸　（349 トン）
調査期間：平成 29 年 5 月～8 月
調査海域：北太平洋南西部海域

調査の目的

北太平洋南西部海域のトビイカを対象に，資源の持続的利用について検討するため，回遊をはじめとする基礎生態調査を中心として本種の分布域や分布密度，漁場特性等を把握する。

本年度調査の主な成果等

（１）トビイカ分布生態の把握

予め設定した定点を基準として，漁況を見ながら定点周辺域も含めて調査を実施した。北から順次操業し 22° N，131° E まで行った後，衛星から得られる水温及び海面高度情報を基に探索し，漁獲が見込める海域で調査した。合計 61 日間 95 回の操業で 37,640 kg の漁獲を得て 4,705 c/s（8 kg 定貫）の製品を生産した。どの調査点でも漁獲が得られたが，1 t 以上の漁獲が 5 日以上継続したのは 28° 20’ N， 135° E 付近（5 月 29 日～6 月 2 日）と 24° 55’ N，135° 10’ E 付近（6 月 20 日～24 日）の 2 箇所であった。1 操業で得られた最大尾数は 16,368 尾，最少 256 尾，平均尾数 3627.0 尾/操業，平均重量 654.9 kg/操業だった。

この間，表面水温は 5 月下旬に 24-29 ℃の等温線が 22-25° N 付近で入り組みながら徐々に北上していたが，7 月に入ると急激に温度が上昇して等温線の間隔が広くなり，単調となった。また，海面高度の変化が大きい水域で比較的漁獲が得られた。新月前後で好漁，それ以外で不漁となる傾向が見られたことで月回りがトビイカの漁獲に強い影響を与えていることが示唆されたが，必ずしも新月の日に漁獲が最大とならなかった。

（２）操業法の検討

前年度調査においては本種漁業の漁獲効率の向上のため，大小の針サイズの比較や減灯など操業手法について検討した。その結果を踏まえて本年度調査ではマイカ針を使用し，効果が認められた減灯を適宜行った。

日中の漁獲は全くなく，触腕の針掛かりも観察されなかった。このようにトビイカの昼操業は釣獲が得られなかった点と大深度操業における水中灯の損傷の可能性から，実操業には不適であることが示唆された。

（３）流通経路及び利用実態

トビイカラウンドブロック製品の売上げは 10,801,500 円（税抜）であった。平均単価は 2,296 円/箱だった。イカ加工品原料としてのトビイカについては，第一に，加工の際に発光器をとる手間が必要であるという課題と，第二に味の点で濃厚な味をつけるサキイカ原料としてはよいが，元々持っている味がそのまま出やすいスルメ原料の代替えとしては難しいのではないかという評価が示された。

またイカ加工業者からは安定供給が課題として示された。

（４）所見

本種は調査海域のほぼ全域で漁獲が得られたものの，好漁場が確認された日数はわずかであることや，昼操業での漁獲が皆無であったことから，現状の漁具や漁灯等によるこれ以上の操業方法の改善を図ることは困難であり，旧大中型船が安定した漁獲を得ることは現段階では厳しいものと考えられた。